

青山君は、真面目な男であったが、先の戦争で帰って来なかった。彼の家は「うずまき」を専門に作つて、別名「うずまきや」と呼んだ筈だ。県会議員をしていた、私の祖父は「作造・うずまき」と呼んでいた。

百津さんは、どうして「ももや」との屋号であったのか、モモ津さんだったからであろうか。

忘れられない事は、吉原釜屋の松原で、松ノ木を切つて居た時、おやじさんは、大木の木に叩かれて怪我をしたことがある。

母の里で丁度そこに居たのだろう、怪我して苦しんでいるときに『かわいそう』だと思つた記憶が百津さんの、親父さんの記憶である。

青山栄吉さんは、よく祖父の所に顔をだした。

井戸掘りの専門家だったことは最近になって知つた。

「判らん事は、かんじやの お婆に 聞いてみりや 分る」とは佐々木さんのオバアサンに対する献辞である。

佐々木さんの家は、親父さんは校長先生だったそうだから、秀才の家系なのであろう。

島山さんも、優しい女の先生であった。わたしの一年先輩がいたが、目立たない優しい男であった。

親父さんは、鉄道員であったと記憶している。

末信さんの昔話は、福島先輩の思い出話である。

福島で始めての、運搬業の話は面白い、おーと三輪を初めて運転したり、運搬業の話は聞き飽きない

松井さんの家は、豪華版の家である。

醤油は、分家のほうに買いにやらされたので、よく知らないが大きな醤油醸造の家であった。

大きな自在鍵を付けた、囲炉裏があつたような記憶がある。

